

「よりどころ」

最上 知道

私の父である極善寺前住職は、84年の生涯を終えて浄土に還りました。父が老いて病気になり入院して死ぬという出来事は、残された子ども達に心のよりどころを教えてくださいました。

父は、報恩講に出仕した帰り道に廊下で転びそのまま立ち上がれず入院しました。それは2008年11月19日の寒い日のことでした。心のよりどころを父親から教えられたのは入院して2日目のことです。父は手足が不自由でしたが、意識はハッキリしていました。病室に2人でいた時、口数の少ない父親が強い言葉でこう言いました。「いよいよ終わりの時が来た」。私はビックリしました。そして「今後は食事は要りません、お断りします」とハッキリと言い、続いて確認するように私に聞きました。「どうすればいいか」と。とっさの事でしたので、私は静かに目をつむり、『なんまんだぶつ』と称えてくれ」と言いました。父親は大きく頷き静かに目をつむりました。これが2人の最後の会話でした。

身体も小さく病弱な父が、80年以上も生きてこられたのは、どんなに苦しい日も、朝一番に本堂で朝事（朝のおつとめ）を欠かすことなく勤め、信じてたよりにすることがハッキリしていたからです。その姿は後に残していく家族や子ども達に、「方向は間違つとらんぞ。そのまま先に進め。これからいろんな苦労があるだろうけど、それは決して無駄ではない」と言っているようで、思わず泣けてしまいました。死ぬ間際まで私達を励まし続けてくれたことが嬉しく、また悲しくて思わず涙があふれ出てしまったのです。

子どもの頃からお寺に預けられて育った父は、750余年前の11月28日、食事をお断ちになって90年の生涯を終えられた親鸞聖人を思い出していたのでしょう。私は父と暮らして60年、人生の最後に信ずることのある強さ、信ずることのある嬉しさを感じるとともに、与えられた人生を生き抜くことの大切さを痛感いたしました。

私達はいつも「なんまんだぶつ」をよりどころにして生きていきたいものです。